

会 告

二〇〇八年度史学研究会大会及び総会は、十一月二日（日）午後一時より、京都大学文学部新館において開催されました。

公開講演は、上原真人・羽田正の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終わりました。

歴史情報源としてみた瓦

上原 真人氏

イスラーム世界と新しい世界史

羽田 正氏

なお、大会と総会に先立って開催された秋期定例の理事評議員会において、二〇〇八年度会務報告がなされました。

二〇〇八年度

史学研究会大会講演要旨

歴史情報源としての瓦

上原 真人

考古学は「過去の人間が作り、使用した〈物〉を材料に、過去の人間の行動を研究する学問」なので、考古学が扱う遺跡や遺物をはじめとする物的資料は、歴史資料の一つである。文書・記録・典籍などの史料の種類によつて、もたらす情報内容や質が異なるように、考古資料もモノの種類によつて内包する歴史情報に差がある。しかし、各モノに即して歴史情報を引き出す具体的作業は不断に実践されているが、それらの情報差について論究することは少ない。

考古学の概説書や入門書においては、縄文土器、縄文時代の石器・骨角器、弥生土器、古墳等々に関して、それぞれ種類・形態・変遷などを叙述しても、それからのどのような歴史情報が得られるか、またどのようなにして情報を獲得するかについて解説が及ぶことは少ない。つまり、資料学的立場で考古資料を読み解く研究は、充分とは言

い難い。

たとえば、大量に消費され、壊れやすく、腐って無くなることのない土器は、古くから年代基準を得る資料、すなわち編年資料として研究されてきた。しかし、現在では、搬入土器や模倣土器にもとづく地域間交流論、産地同定にもとづく交易論や流通論・工人論、おこげや被熱痕跡にもとづく調理法や食生活の復原論など、様々な切口で各種の歴史情報を読み取る試みがある。新たな論文に接し、こんな歴史情報まで獲得できるのかと驚くことは、考古学の専門家でも少なくない。基本となる年代情報に関しても、土器に付着した炭化物が、AMS法により炭素14年代測定の対象となるとは、十数年前には夢にも思わなかった。

瓦は屋根葺材の一つで、かつて普遍的だった藁・茅・檜皮・板などの植物葺材と比較して、耐火性・耐久性にすぐれている。

しかし、古代・中世の日本列島における瓦屋根は、実用的な意味よりも、仏教寺院・宮殿・官衙・城郭などの宗教建築・政治施設を荘厳する意味が強く、その生産・流通も強い政治的規制下に置かれていた。つまり、同じ窯業部門でも、瓦は日常生活に必

要な土器とは異なった歴史情報を内包している。私は『瓦を読む』（歴史発掘11、講談社一九九七年）において、瓦から得られる基本的歴史情報として、(1)年代情報、(2)建物（Ⅱ使用施設）情報、(3)生産・流通情報の三つを挙げた。これ以外にも、瓦がもたらす歴史情報はあるが、この三つが基本であるという考えは今も変わっていない。

日本では、考古学が土器編年を構築する以前に、建築史学が瓦編年を体系づけた。

明治三〇年前後、廃仏毀釈で荒廃した古社寺の保存・修理のため奈良県に赴任した関野貞は、古瓦も建築様式の一構成要素と認識し、個々の建築物や遺跡を年代づける材料とした。その瓦編年は軒瓦の文様をおもな分析対象とし、中国大陸や朝鮮半島を含めた東アジア全体を見渡したものだ。

一五年戦争終結後、古代寺院跡や宮殿・官衙遺跡を大規模に発掘すると、大量の瓦が出土し、新たな歴史情報が得られるようになった。それは関野等が短期間の発掘調査や表面採集、あるいは現存古建築所用瓦の文様から樹立した瓦編年を踏まえつつも、より詳細で明確な方法論にもとづいて獲得された歴史情報であった。まず、出土瓦を

数量的に処理することや、同じ木型で作った同範瓦の比較検討により、創建年代だけでなく大規模な修復・整備がなされた時点で異なる寺院の先後関係、伽藍を構成する建物の造営順序など、新たな年代情報が得られるようになった。また、生産遺跡の調査が進むと、同範関係や製作技術の比較検討から、瓦生産・流通の変遷に関する情報も豊富となった。さらに、普通の平瓦や丸瓦も含めて数量的に分析することで、屋根景観の復原も可能となったが、これは今後の発掘方法の改善をも促している。

こうして得られた歴史情報は、初期仏教寺院造営の進展状況や仏教地方伝播の様相、中央・地方の官宮工房や寺院工房に関わる造瓦組織の存在形態、平安貴族や奥州藤原氏の邸宅における屋根形態など、各時代の政治・経済・社会動向に深く関わるものが少なくない。しかし、瓦の生産・流通・消費が強い政治的規制下にあるために、時には過剰な歴史情報を瓦に求める風潮も生じている。特定型式の瓦分布に、内乱時の勢力図を投影させたり、氏族や王権のアイデンティティを想定するのはその一例である。こうした歴史情報を瓦が内包していないと

断言できないが、瓦に年代情報を求めるという最も基本的な志向は、瓦の文様はアイデンティティのような「変遷しにくいもの」ではないという前提の上に成立する議論であることを忘れてはならないと考える。

イスラーム世界と新しい世界史

羽田 正

あまり強調されることはないが、近代歴史学には理念や概念を実体化するという重要な「効用」がある。自分史、京都大学史、長崎県史などが示すように、歴史はある対象が存在すると考えられたときに記される。逆に、一定の手続きを踏んで「証明」された史実に基づいて歴史を記すことができれば、理念や概念が現実の存在へと転化することも可能になる。典型的なのは、日本、中国、ドイツなど国民国家の歴史の場合である。その意味で、世界各地で国民国家が形成される一九世紀から二〇世紀にかけて、歴史学は実学としての側面を持っていたともいえるだろう。

この歴史学の効用に気づけば、なぜ日本のマスメディアや知識人の多くが、「イス

「イスラム世界」をあたかも実在する地理的空間であるかのように語るのかという問いに對する一つの回答が見つかる。それは、歴史研究者が「イスラム世界」という枠組みを用いて五〇年以上に亘って歴史を研究し、高等学校教育の場で「イスラム世界」史を繰り返して語ってきたからなのである。現代世界における「イスラム世界」は定義の難しいきわめてあいまいな概念であり、アメリカや日本などとは異なり現実の存在とはいえない。しかし、教科書に記された「イスラム世界」史によつてそれがなかば実体化したのである。このことが示すように、何を単位として歴史を語るのかという問題は、私たちの世界認識に密接に関わり、非常に重要な意味を持っている。

環境問題や経済危機など、一つの国や地域だけでは解決できない複雑な問題が次々と生じている現代世界においては、従来からの「国民」意識に加えて、人々が「世界市民」としての自覚を持ち、世界は一体であるという意志をもつて難局に立ち向かう必要がある。そのような自覚と意志を生み出すためには、かつて国民国家史が国民を作り出すことに貢献したように、世界市民

意識を涵養するような新しい世界史認識を歴史研究者が提案すべきではないか。それは「自分たちの生きている世界は一つである」という理念を実体化させる世界史である。しかし、現代日本の歴史研究や教育は必ずしもこのような状況の変化に対応できず、百年前に三分された日本、東洋、西洋という歴史研究や教育の基本的枠組みを堅持したままである。

新しい世界史を構想するには、少なくとも二つの方法があるだろう。一つは、人類と生態や環境との関係の推移に焦点を当てる歴史の描き方である。この方法では、人間と環境要因が主語となる。人類の誕生と諸大陸への展開、農耕の開始と都市化、「旧世界」と「新世界」の一体化、一九世紀以後の「近代」化（特に、人口爆発、科学技術の発展、大規模開発などが重要）が主要な画期となるだろう。この方法は従来の歴史研究の枠を大きく超えることになり、未研究の課題も数多い。考古学者や理系研究者との共同研究が欠かせない。

もう一つは、従来の歴史研究の成果を最大限に活用して世界史を描き直すことである。世界各地でいくつかの異なった「文

明」が成立し、これらが相互に交流を深めながらも独自の歴史をたどった後に、ヨーロッパで生まれた「近代」が世界の一体化を飛躍的に進め現代に至ったとするのが、従来の日本における世界史理解の大筋である。全体としてバランスが取れるように多々工夫がされているとはいえ、この世界史は、19世紀のユーラシア西方地域で創造された「近代ヨーロッパ」概念とそこに至る予定調和的な歴史が軸となつて組み立てられている。この世界史理解からは、自分たちが他とは異なる「ヨーロッパ人」であると考えた人々のバイアス（ヨーロッパ中心史観）をどうしてもぬぐいとることができない。「ヨーロッパ」史が、「近代ヨーロッパ」という概念を実体化させるための装置として働いているからである。二項対立的で必ず「非ヨーロッパ」（具体的には、オリエンタルや「イスラム世界」）を必要とする「ヨーロッパ」概念を前提とするかぎり、世界史は必然的に複数の異なった文明Ⅱ地域世界の歴史をたばねたものとなるざるをえないだろう。

世界は一体であるという意識を生み出すような世界史叙述を実現するためには、し

たがって、「ヨーロッパ」史の脱構築がまず必要である。はじめから「ヨーロッパ」とその歴史があったと考えず、いわゆる「イスラーム世界」の歴史も含めてユーラシア西方地域の過去に起こった諸事象を丁寧に解きはぐしパーツにばらして、全体を新しい世界史の視点からもう一度解釈し組み立て直してみればどうだろう。「中華」という概念に基づいて構想された中国史についても同様の手続が必要である。これまでの国、文明ごとの歴史研究の成果を「一体の世界」の歴史という観点から見直せば、そこに浮かび上がる過去の解釈と叙述は、これまでの世界史とは相当異なったものとなるはずである。

二〇〇八年度

史学研究会大会・総会の記録

史学研究会の二〇〇八年度大会・総会は、一月二日（日）一三時から一七時まで、京都大学文学部新館において開催された。総会では、藤井譲治理事長による挨拶の後、横山良氏を司会に選出して、庶務・編集・会計・広報に関する報告がなされた。

庶務（中砂明徳常務理事）からは、役員交代、今年度の例会実施、会員数・史料送付数の動向などについて報告があった。また、来年四月十八日（土）の例会開催（テーマ「戦争」）が案内された。

編集（南川高志常務理事）からは、「史林」が順調に刊行されていること、委員の増員・副査制度の整備など編集体制の強化を図っていること、本年四月に開催された「環境」をテーマとした例会の発表と討論が第九十二巻一号の特集号にまとめられる予定であることが報告された。

会計（泉拓良常務理事）からは、二〇〇八年度予算、会費滞納者の退会規定作成の準備、東京堂への委託販売の実績、振込み用紙の封入を来年度から年二回（三月刊行の二号、一月刊行の六号）とすることが報告された。

これに引きつづき、公開講演が行なわれた。講演は次の二本であった。

上原 真人氏

「歴史情報源としてみた瓦」

羽田 正氏

「イスラーム世界と新しい世界史」

講演者紹介と司会は、それぞれ泉拓良理事

と濱田正美理事がつとめた。講演内容は本号に掲載されているが、ともに熱のこもった報告であり、日曜日であるにもかかわらず一〇四名の聴講を得ることができた。

公開講演ののち、吉本道雅理事が閉会の辞を述べた。大会終了後、オーブンな立食形式の懇親会が開かれた。

なお、総会と大会に先立って開催された秋期理事・評議員会において、庶務・編集・会計・広報の各常務理事から会務報告があったほか、次の八名が編集委員に加わることが了承された。

吉川真司、吉本道雅、濱田正美、小山哲、上原真人、永井和、杉本淑彦、米家泰作（文責 中砂明徳）

『史林』投稿規定

（二〇〇八年二月改定）

◇資格 本会会員であること。

◇投稿受付原稿の種類、長さ

論説 1段組54字×19行の体裁で、

三二〇〇字以内

研究ノート 2段組29字×20行の体裁で、

二〇〇〇字以内

研究動向 2段組29字×20行の体裁で、